

## 第2回 伊東市立学校・園適正規模及び配置検討委員会会議録

- 1 日 時 平成28年6月23日(木) 午後1時00分～午後3時08分
- 2 場 所 伊東市役所高層棟 8階大会議室
- 3 出席委員 18人
- 4 欠席委員 2人
- 5 事務局 教育部長、教育部次長兼教育総務課長、教育指導課長、幼児教育課長  
他6人
- 6 会議の経過

**事務局：**皆さんこんにちは。本日は悪天候の中お集まりいただきましてありがとうございます。当委員会の進行につきましては、設置要綱により委員長が議長として進めていくこととなります。委員長お願いします。

**委員長：**午前中は雨が降り注ぎ、バケツをこぼしたような天候となりましたが、なんとか天候も回復してきました。今日はひとつよろしくお願いします。

さて、前回の会議の様子を見る限り、この学校規模・配置というテーマは、なかなか意見の出し辛い問題であるように思いました。そこで、冒頭、私個人の構想を述べさせていただき、この後の議論の呼び水としていただきたいと思いますのでご容赦ください。

私のいたアメリカの学区は本当に広く、スクールバスを使って色々な地域、例えば遠い砂漠の真ん中からも子どもたちが集まってくるような地域交流や文化交流が日常的な環境でありました。これを伊東市に置き換えれば、北の宇佐美と南の八幡野の子供たちが交じり合い、八幡野の子供が宇佐美のお祭りにも参加するような文化交流もできるような環境。そんな環境の実現のため、伊東市の学校と園を一つにまとめてしまってはどうかと。スクールバスを用意して、保育園から中学校まで兄弟姉妹も全員が集まる。それぐらいスケールの大きい構想を考えていった方が面白いんじゃないかなと。もちろん、一つのまとまりでは人数が多過ぎるという場合には、北部地域、南部地域と2つの学校にしていくのも一つの方向ではあると思いま

す。

小規模だからこそ、地域の特色を活かした運動会やお祭りができるという面では、賛否両論あるかと思いますが、将来を担う子どもたちには、地域の文化を互いに教え合う、学び合うというようなグローバルな考えを持ってもらいたいと願っており、是非、委員の皆様におかれましても、宇佐美だ、八幡野だ、と地域の事情ばかりにとらわれず、伊東市全体を一つに捉えて、将来の子供たちにとってより良い環境を目指していきたいと思いますので、御協力の程よろしくお願いいたします。

**委員長：** それでは、会議に入らせていただきます。開会に先立ち、事務局より諸般の報告があります。事務局お願いします。

**事務局：** 第2回伊東市適正検討委員会の開催に当たりまして、まず諸般の報告をさせていただきます。本日、2人の委員から欠席の連絡が入っておりますので報告させていただきます。また、本日の会議時間は午後3時までの2時間を予定しておりますので、重ねてよろしくお願いいたします。

**委員長：** 続きまして、前回欠席された委員と、役員交代などに伴い今年度から新たに委員に就任いただいた方々に対し、教育部長から委嘱状をお渡しいたします。名前を呼ばれましたら、その場でお立ち願います。

(委員名簿の掲載順に紹介し、委嘱状を交付)

**委員長：** それでは議題に入ります。本日は、報道機関に加え、傍聴人も何人かいらっしゃるようです。本委員会設置要綱第6条第4項では会議は公開を原則としており、特別な理由がなければ本日の会議も公開により行いたいと考えておりますが、ご異議等ございますでしょうか。

(「異議なし」の声)

**委員長：** ご異議なしと認め、公開により行うことといたします。

## 議題(1) 学校の適正規模について

**委員長：**議題(1)「学校の適正規模」について事務局の説明を求めます。

(事務局から資料に沿って説明)

**委員長：**只今の説明についてご質問がございましたら、お願いいたします。

我々、団塊の世代は1クラス60人で学び、高校も50人のクラスで学んできました。今では30人前後となり半分の規模になってしまっていますが、是非、ゼロベースで考え、将来的に子どもたちが楽しく勉強できる、学校に毎日行きたくなるような適正人員・適正配置を考えていけたら良いなと思っていますので、忌憚のない意見をお願いします。

**委員：**川奈や池は学校を維持することが大変であるのは理解できますが、そもそも、学区とはどのように設定されたものなののでしょうか。行政区の区分けを基に人口分布で決められたものなのか、あるいは距離で決められたものなののでしょうか。

**事務局：**通学距離の上限は国が基準を示しているということと、学区は行政区を基本に成り立っているということは前回も説明させていただきましたが、何故そこで線を引いたのかという経過までは分かりません。

**委員長：**行政区にとらわれず、伊東市を1つで考えていただくこともお願いしたいのですが。

**委員：**委員長の仰ることは分かりますが、やはり自分は区の代表である以上、各地域の住民の意見がよく耳に入ってくるものですから。例えば川奈小は人数が少ないが(指定校変更制度で)南小に行っている子も多く、そういった子が学区どおりに川奈小に戻ることで解消されるのではないかとっている保護者もいる。つまり、今後、アンケートを取ればハッキリとしたことが分かってくるでしょうが、「だからこれでは駄目なんだ」ということが分かれば次のステップに進めるのかもしれないが、今の状態では人数の問題だけで、学校の効率化のために統廃合を進めるという理解で、それはおかしいなと思い、質問させていただきました。学区の根拠は特にないということですか。

**事務局：**学区は、伊東市立小中学校の通学区域に関する規則に定められています。

松原のこの住所は西小ですとか、川奈であれば川奈ホテルに近い番地であれば川奈小、ここより上は南小ということが定められております。

また、通学区域検討委員会設置規程というものもあり、学区の検討・変更に関することや現況調査が、この委員会の所掌事務として決められています。

**委員：**松原は中心市街地であり、活性化しなければならない地域でありながら、後継ぎとなる子どもたちは郊外で生活しているため、特例（指定校変更制度）により郊外から子供を連れて西小学校に通っているようなケースが多い。これが特例の形でなく自由にしてよければ、もう少し各学校の人数のバラつきも無くなってくるのではないかと考えている。ただ、全体のバランスのことを考えると今後、学校を建てたり整備するに当たっては、対象となる学校がバラバラになってしまいそれも出来ないのかもしれませんが、そういう考えも含めて、今後の方向性をはっきりとすべきだと思います。

**委員長：**他に質問はございませんか。

**委員：**4ページの表を見てもみますと6年生に比べ1年生の人数の方がかなり少なくなっているということは、現状の規模を基準に考えるよりも、将来の推定数を基準に考えるべきではないかと思いました。

また、2ページの中段に、単学級である東小、川奈小、富戸小、池小には「課題」があって、学校統合の適否を速やかに検討する必要があると示されています。これらの学校にはどのような課題があるのかについて、この後のアンケート調査で明らかにしていこうということですが、国が手引きでどのような課題を示しているのか教えてほしい。

**事務局：**前回の会議資料7ページに示した「児童生徒数の減少によるメリット・デメリット」がそれです。国の手引きですので、考えられ得るものは一通り列記されており、その中で、伊東市に該当する課題があるのかどうか、また独自の課題があるのかどうかについて、アンケート調査を通じて把握したいと考えております。

**委員：**今回のアンケートは、学級編成に伴うメリット・デメリットに関する意向を

探るもののようですが、今後は、通学に関するリスクやコストということについても調べる必要があるのではないかと思います。今回から参加された委員には前回の資料は配られていますか。

**事務局**：全員に配っています。会議録も含め資料は全て送付してあります。

**委員長**：他に意見はございますか。

（「なし」の声）

**委員長**：ご発言がないようですのでトイレ休憩のため10分間ほど休憩します。

（休憩）

**委員長**：休憩前に引き続き会議を開きます。他にご意見はありませんか。

**委員**：子供が少なくなっていくという前提でこの会議が進められていますが、人口減少問題については国の方で対策をされており、それとの兼ね合いで学校の適正化を考えていくという理解で良いですか。例えば、今の人数が最低で、徐々に回復するという長期的なビジョンがあるのか教えてください。

**事務局**：第1回の会議でも説明させていただきましたが、伊東市では昨年、人口ビジョンと総合戦略を策定し、伊東市として人口を増やすためにいろいろな戦略を立て、目標値も設定しています。具体的には、合計特殊出生率を上げたり、学校が楽しいと思う子どもの割合を増やすなど、子どもの環境や子育てをより良くしていくことを戦略として立てています。計算に基づく「将来推計」や総合戦略を反映した「人口ビジョン」もありますが、まずは平成33年度に今よりも650人減るという事実も踏まえて、この会では適正な規模を見い出していただけたらと思います。

**委員**：今の子育て環境では一人しか産めないが、幼稚園や保育園を整備すればもっと子供を産んでもいいと思うようになるかもしれない。そのようなことは考えなくても良いのですか。

**事務局**：そこも含めて考えると、会として答えがまとまらないと思いますが、いかがでしょうか。

**委員**：今回のアンケートに新1年生と幼稚園や保育園も含めて実施すれば、そのあ

たりの意見が出るかもしれない。

**委員長：**アンケートは次の議題となりますが、委員が言うように、若い人が子供を大学まで行かせてやれるくらいの経済的余裕ができるような伊東市を作っていかなければならない。そういうものも頭の中に入れながら、検討していきたい。

**委員：**私が大原町に住み始めたのは50年前。その当時は、子供会は元気が良かったが、沢山いた子どもたちも結局、伊東に職場がないからほとんど市外に出て行ってしまい、残っているのは年寄りだけとなっています。子どもの数が減ってきているのは、こういったことから始まっているのだと思います。これを少しでも良くするにはどのようにすべきかということも、会議テーマの一つになるのではないのでしょうか。

**委員長：**そうですね。子供たちが学校に行きたいという気持ちを醸し出すような、そういう夢のある学校配置を考えていかなければならないと思います。小中学校で子供が今、4千人いたとしても、将来的には3千、2千といった人数になってくるのではないかと。その時にどうするのか。思い切って学校を1つにまとめて、学校に農園を作り、親御さんも一緒に農園をやるというのはいかがか。行政の問題になってきますが、事業所を作るのもいい。何しろ子どもたちが楽しいという学校を作ってあげたい。そのために、みんなで意見を出し合う会になりますので、本当に何でも意見を出していただきたい。

**事務局：**今後の人口減少を心配される発言がありましたが、将来の人口減少は鮮明であり、伊東市としても国の地方創生に基づき、雇用の創出と安定、若い人たちが伊東に移り住んで、子育てが十分にできるまちづくり、移住・定住対策等の構想を総合戦略として策定いたしました。この総合戦略は行政が議会と共にしっかり進めて参ります。

ですが、この会は、将来の人口減少を見据えた中で、学校の規模・配置における課題を抽出し、基本的な方向性を決めていただく会です。総合戦略を抜きにして、子供たちの教育環境のより一層の整備を見据え、当然保護者や地域の意見を最大限

尊重する中で方向性を決めていきたいと考えていますので、御協力の程よろしくお願ひします。

**委員**：学校と学校を一緒にしたとき、例えば、宇佐美の子たちを伊東の町の方に通わせるとなるとスクールバスを出すのか、そのお金は誰が出すのかなどの細かい問題が出てくると思ひます。

学童の問題で言えば、もし学校を合併したとすると当然学童も合併することになるが、学童は定員が一杯となっており、合併したがために入れなくなる場合もあるのではないか。それに加え、クラス定員や支援員の人数が決まっている中、法改正により、今後は6年生も学童に入れるような指針が示されており、合併したときに学童が成り立たずに待機児童が大変多くなってしまうと困ります。女の人働けなとか、学童にも待機児童がいますのでその辺も考えてほしいなと思ひます。アンケートには学童の話が一切出てきていませんので、加味していただけると幸いです。

それともう一点。会議が始まってここまでの間、なかなか挙手をして発言をしづらい雰囲気のように感じています。会議時間の問題もあるでしょうが、委員一人ひとりから均等に意見をもらうことも必要なのではないのでしょうか。例えば、統廃合をしたときに、先生の立場からすれば「働く場所がなくなってしまう」と思ひ先生もいると思ひますし、保護者の中には「学校が遠くなってしまうたら通えない」という意見も出てくると思ひます。

**委員**：小中学校も同様ではあると思ひますが、高校で今一番問題となっているのが、不登校のケースが多いこと。色々な原因があるが、単学級は子供にとってすごい負担で、人間関係に行き詰ってしまうと、その人間関係から抜け出せなくなってしまう。他校に転校することも考えられるが、文科省が出している国の基準、適正規模という数字は、決して行政の都合だけではなく、子どもを健全にたくましく育てていく規模という一面もある。先ほど委員長は50人で1クラスと仰っていたが、それくらいの人数ならばたくましく育つと思ひます。人口減少の問題があるが、学校の理想としては複数の学級を持っている学校を構築していく。子供に対しての質のいいサー

ビスを提供していく。例えば、先ほど説明のあった静浦の小中一貫校は単学級です。今でも部活動のために他校へ吸収されてしまうのはなかなか止められない。ある程度の規模があるとできるが、小さい規模だとなかなか難しい。

高校だと6クラスはほしい。段階はあると思うが、増やしていく、人を育てるという意味でそんな気持ちがかかなりあります。

**委員：**同じ意見で、単学級はコミュニティが1つしかなくなり、逃げ場が無くなってしまうと思う。それではどれくらいのクラス数が良いのか、と言うと、自分としては子供の頃の4クラスの規模の良さを知っているし、一方では、4千人の学校を作るという壮大な構想も良いと思うし、そこは委員一人一人の考え方だと思うが、自分の価値観を出し合っても議論が進まないのかなあと。この場に集まっている委員は、各団体の代表に選ばれるような一定の社会的に立場がある人なので、その価値観というか自己肯定観を前面に持ってしまうと、学級委員をやらないような一般的な子どもたちが望むことが見えなくなってしまうので、そういった視点も持ちつつ、普通の子が幸せな学校生活を送れるような規模にしていきたいと思います。

**委員長：**まだまだ意見が出てきそうですが、時間の都合もありますので、次のアンケートの議題に移りたいと思います。みなさんの意見を入れながらアンケートを実施していきたい。またアンケートが集まったら、検討していきたいと思います。

## 議題(2) アンケート調査の実施について

**委員長：**次に、議題(2)「アンケート調査の実施」について事務局の説明を求めます。

(事務局から資料に沿って説明)

**委員長：**このアンケートを出すということについて、ご意見ご質問ございましたらお願いいたします。

**委員：**これから小学校に通うに当たって、父兄はどう思っているのかは必要かと思うので、幼稚園・保育園の保護者にもアンケートを取ってほしいと思います。

**委員：**アンケートの対象について、将来を見据えてということですが、高校生も対象にしたらどうでしょうか。高校生が大人になって子どもを産んだ頃、この学校規模の適正化の実施時期に当たってくる年代ではないかなと思います。

**委員：**アンケートの結果が出てからそれをどう扱うかですが、これにより左右されるということではなく、参考ということでしょうか。

**委員長：**そうです。

**委員：**自分の子どもの現状に満足している親と、していない親とでは回答の仕方が変わってくるのではないかと。いじめを受けていたり、不登校の子の保護者は少数派かもしれないが、そういう少ない意見も分析しなければならないと思いました。

子どもにとってのメリット、利益、子どもが高校生になり、社会に立ってから将来にわたる利益を考えた中で結論を出していかなければならないと思います。

通学に関する質問や地域住民の意向の問題が出ましたが、それはスクールバスを用意しようとか、地域住民にも理解してもらう必要があるとかになりますが、あくまで重きを置くべきポイントは自ずと決まってくるのではないかと思います。

**委員長：**アンケートの調査対象について、幼稚園、保育園から高校までという意見が出ておりますが、いかがでしょうか。

**委員：**幼稚園・保育園の保護者には、自分の子を学校に入れる時に小規模校ではなく大規模校に入れたいとか、あるいは、その逆の意見も出てくるのではないかとということで、幼稚園・保育園も対象としてはどうかと提案しました。

**委員：**とりあえずは、幼稚園・保育園を含めて、小学校、中学校で実施して、意向を見てみるということでしょうか。

**委員長：**高校だと市外からの生徒もおりますし、県立になってしまうので、市立の中学校までということで皆さんよろしいでしょうか。

(「異議なし」の声 )

**委員：**アンケート内容についての質問です。11ページと12ページに「メリット・デメリットを1つ選びなさい」とありますが、こういうメリット・デメリット

のようなものは、1つだけ選ぶというのは難しく、これだけ多い人数からアンケートを取るならば複数回答を可にした方が適切ではないかと思います。また、デメリットという表現はどのようなのでしょうか。良い点、良くない点といった表現の方が親切かと思います。

**委員長：**「メリット・デメリット」は「良い点・悪い点」とし、複数回答可ということによろしいでしょうか。

（「異議なし」の声）

**委員長：**事務局には、調査対象を幼稚園・保育園まで広げ、今、指摘があった点を修正の上、アンケートを実施してもらいたいと思います。時間もかなり進んできましたので、幼稚園・保育園の話について事務局から説明をお願いします。

（事務局から幼稚園や保育園の話について説明）

**事務局：**小中学校とは若干ルールが異なり、国の基準もなく、教育委員会で方針を定めていくこととなります。平成6年の話になりますが、竹の台幼稚園新井分園がありました。地区の園児数の減少に伴いまして、園児数が0になってしまったことから、平成6年から休園という形で幼稚園の業務をストップしております。この4月からは正式に廃園の手続きをとらせていただいております。

伊東市では、それ以降園児数が市全体でも少なくなっている。幼稚園の方としましても、学校のような校区を取り外しまして、どこから通ってもいいですよ、3歳も受け入れる形で拡大はしつつも園児数の減少が止まらないという状況になっておりました。その中で、伊東市教育委員会から伊東市教育問題懇話会という組織を立ち上げて、その組織に諮問をしまして、本市における将来の伊東市立幼稚園のあり方について、答申を平成20年にしております。その答申の基本的な考え方として、大きく柱が3つございまして、1つ目は園児にとって望ましい教育環境を整えること。2つ目は伊東市全体の教育環境に著しい格差を生じさせないこと。3つ目に地域の状況、特色、実状を考慮し地域に配慮することなど、基本方針に基づき対応をしてきております。

具体的には伊東幼稚園湯川分園を平成 26 年度から、川奈幼稚園については平成 28 年度から休園させていただいております。湯川分園につきましては、園児数が減少し、各学年の男女比率が非常に悪くなり、また東日本大震災の関係もありまして津波の危険エリアに園があるということで、伊東幼稚園本園と統合をしております。

川奈幼稚園でも、年々著しく園児数が減少しまして、地域のお子さんが 0 人、通ってくるお子さんが川奈臨海学園のお子さんだけになりまして、いわゆる一番大切な幼児期におけるお友達関係が築けない環境を考慮し、休園とさせていただいております。

今後も教育問題懇話会からの答申に基づき、園児にとって望ましい教育環境を整えることを基本方針として考えますが、昨年度から国の方の施策としまして、新たに子ども子育て支援制度が設けられましたので、この委員の皆様には、幼稚園という枠にとらわれず、保育園も含めてより良い環境がどのようなものなのかという見地でご意見をいただければと思います。

**委員長：**ありがとうございます。その他に何かご意見はございませんか。

**委員：**アンケートの取り方やその内容に関する意見が出ましたが、今度からそれを基に話し合いが進められていくのだと思います。その中で、数だとか方法論に走ってしまうと、最終的に「何故なのか」が見えなくなってしまう恐れを感じます。会議の進め方としては難しいかもしれませんが、「こういう子供たちを育てたい」というビジョンのようなものがまずあって、いつでもその原点に戻れるような、委員のみんなが共有できるような体制が必要なのではないでしょうか。

**委員長：**事務局は、今の意見を加味しながらアンケートの修正をお願いします。

### 議題(3) その他

**委員長：**次に、その他を議題といたします。委員の皆さんから何かございましたら、ご発言願います。

**委員長：**事務局からお願いします。

**事務局：**アンケートの対象は、小学校 3 年生・6 年生の保護者、中学 3 年生の保護

者、小中学校の教職員、小6中3の子どもにも。さらに本日の会議で出てきた、幼稚園、保育園の保護者にもアンケートを行っていく。幼稚園、保育園の案がありませんでしたので、幼稚園の先生などに確認しながら、事務局としても内容を精査してやらしてもらおう。

また、学校を通じてこれらの内容を聞く。細かい点は適宜修正をしていく。

今年度はあと2回程度を計画しております。次回は「アンケートの集計結果について」を考えており、結果集計後、年内に第3回目の開催を予定している。その際には、保護者の立場、教職員の立場、子どもの立場、数値データでお示しができる。それをもって、みなさんからご意見を頂けたらありがたいと思います。

現在行われている6月議会において市長は「この会議で出された意見や課題、方向性につきましては、各地域や関係団体に持ち帰り、議論していただくことで、市民を巻き込み、さらに踏み込んだ議論へと繋げていきたい」との見解を示しておりましたので、委員各位におかれましてもご理解とご協力をお願いしたいと思います。

その中で、事務局職員からの説明等が必要な場合は、要請していただければ対応したいと考えている。

**委員長：**アンケートをいつ配布するかについては、学校や園の都合もありますのでご了承下さい。その他に意見や質問はございますか。

**委員：**10分の休憩を取りましたが、意見が活発に出ているので考えてほしい。

**委員長：**分かりました。これもちまして、本日の議題はすべて終了いたしました。ご協力ありがとうございました。以上で本日の会議は閉会とさせていただきます。

以 上